

きゅうり栽培の神様

「どこまでこだわられるか。そこが戦略なんだよ。」武雄町できゅうり栽培を手掛ける山口仁司（やまぐちひとし）さんは、企業経営者のような研ぎ澄まされた言葉で語る。山口さんは「きゅうり」という食材にこだわり、自らの栽培を愚直に追求し、日本を代表する関東の百貨店などから指定生産契約を受ける程の、確固たるブランドを築いてきている、いわばきゅうり栽培の神様と言えるよう

な人だ。栽培方法への挑戦は、農業一筋を貫いてきた43年経った今も尽きないという。山口さんは自らの足で全国各地から、果てはきゅうり栽培の最先端に行く異国オランダからもノウハウを吸収してきたという。「機械や設備で全ては見えない。だから、手を掛けただけで満足せずにきゅうり一道を追求し続ける、この強い意志が山口さん自身を確かなブランドとして確立させてきたに違いない。その情熱に裏付けされた結果としての確かなきゅうりの味が、関東だけでなく海外まで、

世の人々を広く魅了するのだろう。かつて鍋島茂義が日本の技術の先端に立っていた時のように。

一方、山口さんの後方に目を向けると、山口さんの大きな背中を見て歩き出した若者たちの姿が見えてくる。彼らはまだ歩んできた足跡は少ないが、先人や山口さんと同じ血筋を持っている。パクチー（地中海原産の香草）を武雄の新たな特産物として確立させたい、と意気込む、若手農家で形成される武友会（たけともかい）だ。



きゅうりはある程度、幹が成長した状態から果実の生産を繰り返す野菜で、幹の成長の過程で、果実が成熟するのが病弱になるのかという将来がわかるという。このため、「子育てと一緒に、幹が成長して本格的に生産が始まるのは、いわば18歳の大人になる時。それまでは、その子の育ち方や癖を見てしっかりと修正してあげるんだ。」と、満面の笑みできゅうり栽培のやりがいを語る山口さんと、その思いを継承する息子であり若社長の真彦（まさひこ）さん。

